

---

# あらびあんないと!?

さかまだ ゆれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あらびあんないと！？

### 【Nコード】

N74480

### 【作者名】

さかまだ ゆれ

### 【あらすじ】

ジーニーにジャファーって、アラビアンナイトの世界！？でも、なんかちょっと違う…な世界に来てしまった主人公が繰り広げるラブコメディ（の予定）。

\*注：性転換（男 女）ものになります。

「おっぱい……」

そのとき俺の頭ん中は、おっぱいでいっぱいだった。

待ちにまつた放課後、友人とゲーセンに行った帰りのはずなのに何で砂漠にいるんだ、とか。

日射しが強い、とかそんなレベルじゃなくこのままだと干からびてしまいそう、だとか。

紺色のブレザーで砂漠にいるなんて自殺行為なんじゃないか、とか。

そんな自分の命と直結しそうなことが、夜ごと母さんから聞かされる“ご近所の噂話”と同レベルでどーでもいいことのように思えた。

そう。とにかく今は、“おっぱい”なのである。

「おっぱい……とは何か？」

ある意味究極の命題に考えを巡らせてみる。

赤ん坊の食料源。

脂肪の塊。

女性の象徴。

性欲の対象。

憧れ。

見たい…

揉みたい…

吸いつきたい…

「ついでに、はさまりたい…っじゃなくて!!」

頭をふり、あらぬ方向に突っ走った思考のリセットを試みる。

お題は“おっぱいとは何か？”だ。

願望を語ってどうする俺!!

おっぱいとは“俺から思考能力を奪うもの”である。

これも答えの一つだな。うん。

まあ、もともと思考能力なんて無いに等しいんだけど。悲しいことに。

石橋を叩かずに渡るタイプです。

「で、何だっけ……………」

そうそう、おっぱいとは何か考えてたんだっけ。

「やっぱ、女性の象徴ってのが基本だよなあ…」

換言すれば、男性の象徴では無いということだ。（最近では、そうとも言い切れないけれど…）

なのに…そのハズなのに…

「なんで、君は男の俺にくつついてるのかな？」

軽く手を添えると“知らないよ”とでも伝えたいのか、おっぱいがかすかに揺れた。

手の平に余るボリューム。

硬く、そして柔らかな触感。

先端はワイシャツの布地を押し上げ、かすかながらにその存在を主張していた。

思わず喉がごくりとなる。

「ん…？」

そこで、ふと思う。

“ない”ものが“ある”ということは、“ある”ものが“ない”の  
ではないか、と。

先程とは違う意味で喉がごくりとなった。

怖い。物凄く怖い。確かめるのが。

あつて当たり前のモノが無かったら…

だがしかし、いずれは見ざる終えない部分だ。

「…いつかはトイレに行きたくなるだろ?…」

そう自分に言いきかせて、恐る恐るスラックスのジッパー部分に手  
を伸ばす。

そこに息子さんがいることを祈りながら…。

結論から言うと、息子さんはいませんでした。

スラックスの前をくつろげて確認したけれど、いませんでした。

「終わった…」

なにが？とはきかないで欲しい。

ナニが？も駄目だかな！！

今、確かに何かが終わったのだ…

終わり、それは始まりでもある。

俺は今、未知なる世界へ足を踏み入れたのだった…と、綺麗にまとめて終わろうと思ったけど…

「終われるかー！誰か説明プリーズ！！」

まあ、もちろん応える声はな…

「何を説明すればいいの？」

ありました。

驚きつつ慌てて声が聞こえた方へ顔を向けると、真っ白なターバンとマントに身を包んだ、イケメン様が立っておりました。

全身が布で覆われているため顔しか仰ぎ見ることができないが、それでも雰囲気イケメンとかではなく本気のイケメンであることが伺えた。

成長期を迎えても未だ170に届かない俺の頭上10cm付近にあるお顔は、タレ目がちな瞳と、向かって右の目の下にあるホクロが印象的な顔立ち。

毎朝こんな顔が鏡にうつつたら、同級生のあの子もその子も俺に夢中だったに違いない。

人って生まれながらに不平等だよな。本当。

「っていつか君、そんな格好で死にたいわけ？自殺志願者ー？？」  
そうだった。頭の中がおっぱいでいっぱいだったからスッカリさっぱり忘れていたけれども、ここ砂漠でした。

思い出した途端、人とは厳禁なもので猛烈な暑さが俺を襲った。

少しでも暑さから逃れられればと手を頭にかざすと、すっかり熱をすった髪の毛から熱気が立ち上ってきた。うっかり触るものなら、真夏のトタン屋根のごとくヤケドしてしまいそうなほどだ。

「…いや、死にたくはない。死にたくはないんだけど…なんだか…気が…とおく…」

おお、地面が近づいて来るうー



「おい、ちよつとおーもう、そんな格好で叫んだりなんたりしてるからだよおー本当、アホお」

「俺はアホじゃねえ…たぶん」

マントの間から伸びてきた、意外に逞しい2本の腕に抱き留められながら俺は意識を手放した。

そのとき、俺は水道を求めて走り回っていた。夢の中で。

ほら、よくあるだろ？遅刻しちゃ行けない日に遅刻する夢を見たり、睡眠中に尿意に襲われてトイレを探し回る夢を見たりとかさ。

そんな感じで、今俺は猛烈に喉が渴いていて、だから水道を求めて走っていた。そして、どの水道から一滴も水が出ないという。

こういうとき、夢って妙にリアルだよな。しかも、自分の夢なのに融通がきかないときた。

ーもう、このまま渴いていてひからびてミイラになってしまうのだから…

夢の中でどうしようもない無力感に苛まれていると、頬に冷たい何かが降ってきた。

はっとして上を見上げると、（いつの間にか現れた）頭上の水道から水が！！

必死になって蛇口に口を当てた。冷たさは足りないが、確かに水だ。無我夢中で飲み込んでいく。

「おいおい、そんなに一気に飲んで大丈夫う？」

「うるさいな。やっと見つけた水だぞ。これが飲まずにいられるか！」

突然夢に乱入してきた声にそう答えようとした瞬間、水が気管支に入り込み俺は盛大にむせた。

「ほらあ、言わんこっちゃない。本当に君はアホの申し子だなあ」

さっきの奴といい、今度の奴といい俺は…

「アホじゃねえ！…たぶん」

「たぶん」って、少しは自覚あるってことお？」

叫ぶと同時に夢から醒めた俺の視界に飛び込んできたのは、先程のイケメンさんだった。

イケメンさんは片手で俺の背を支え、もう一方の手でコップを持ちながら、俺の顔を覗き込んでいた。どうやら、俺に水を飲ませてくれていたらしい。

「水…どうもありがとう。でも、アホじゃない…と思う」

「どういたしましてえ。で、アホじゃなかったら、どうして砂漠にあんな格好でいたのお？とつても優しい俺に会えたからよかったものの、君あのままあそこに居たら死んでたよ」

そつと俺を横たえさせながらイケメンさんは、本当に危険だったんだからね、と付け加えた。

されるがままに横になった俺は、ようやくここが砂漠ではないことに気がついた。自分がいるのが砂の上ではなく、ベッドの上だということにも。

薄茶色の煉瓦壁で囲われた室内は、強烈な日差しと外の喧騒をほどよく遮ってくれているようだった。砂漠とは段違いの心地よさ。

部屋の一角に儲けられているバルコニーからは、ときおり生温い風がふきこんできた。

「迷惑かけて本当にごめんなさい。でも、自分でもどうして砂漠にいたのかわからないんだ。気づいたら砂の上に倒れていて…」

ーしかも、女になっていた。

その言葉は、グツと飲み込んだ。これ以上変な奴だと思われるのも嫌だし、信じてもらえないと思ったから。

「確かにその服、この辺じゃ見かけないつくりだしなあ。人買いの落とし物かなあ？君、不器用そうだし、その容姿じゃねえ…」

「（売れないってか）ハハハハハ…」

人買いというご職業の方がいるのにもビックリだけれども、それ以上失礼極まりないイケメンの発言に、俺は苦笑いを浮かべることができなかった。

ごめんなさいね、何のとりえも無さそーな平凡くんで。

「まあ、君がどこから来たにせよだ、これからどうするう？今日一晩ぐらいなら面倒見てあげられるけど」

「ありがとうございます。…できれば、これから日本の大使館に連れていっていただませんか？そこからは自分でどうにか…お礼は家に着いたら必ず…！」

「ちよつと待つて。ニホンのタイシカンって何？」

思わぬ質問に驚きながらも、俺は答えた。ってか、大使館ってどう説明すればいいんだ？

「え、えつと、日本が自分の母国名で、大使館は…日本からこの国に派遣された人が住んでるところです」

「ニホン…ニホンねえ…俺、旅するのが仕事みたいなものだから地理に結構詳しいけど、そんな国名きいたことないよ。ちなみに、タイシカン？とか言うのもこの国には無い」

「……………え？」

傲慢かもしれないけれど、地理に詳しいと言う人が日本を知らないわけない。なのに知らないという。それって、どういうこと???

しばらくの間フリーズしていると、目の前に皺くちやの紙が広げられた。

「ほい、これ世界地図。二ホンってどの辺かわかるう？」

「…これが、世界地図…？」

そこに記されていた世界の形は、見慣れた形ではなかった。というか、初めて見る形だった。

一瞬、からかわれているのでは？という考えがよぎったが、目の前にいるイケメンがそんなことをする理由も無い。

「いったい今、俺はどこにいるんだ…？」

身体中の毛穴が開き、一瞬にして体温が下がるのを感じた。同時に、両の手に制御できない震えが襲い掛かる。

「だ、大丈夫う？どうしたのお？」

砂漠ではターバンに覆われていた髪の毛も、今は風にそよいでいる。青空と同じ色をした髪の毛はフワフワしていて、触ったら気持ち良さそうだと頭の端っこで思った。

髪の毛と同じ色の瞳をぼんやり見つめながら、

「地図に日本が載ってない。っていうか、その世界地図、俺が知ってる地図と違う…」

こんなこと言っても、イケメンさんは困るだけだろう。そうわかっているけど、口にせずにはいらなかった。

「今、俺、どこにいるのかな？帰れるのかな？？」

次の瞬間、  
情けないことに俺は涙をこぼしていた。



「ごめんなつ、急に泣いたりして。泣いたって、何も、変わらないのに…」

必死に笑おうとするけれど、そうすればするほど嗚咽が酷くなり、涙も鼻水も気前がよくなるようだった。

恥ずかしくて、カッコ悪くて腕で顔を覆ったそのとき、イケメンがずっとその手を俺の頭に伸ばすのを感じた。そして、子どもをあやすような優しい手つきでポンポンと頭をなではじめた。

途端に、俺の涙腺は完全に崩壊した。懐かしく、優しいリズムを感じながら声を出して泣いた。

その間中、イケメンが手を休めることはなかった。

目がはれているのがわかるほど泣いて、俺はようやく落ち着いた。

落ち着いたっていうより、疲れたって方が正しいかもしれない。もう、泣く元気もない。そんな感じだ。

泣き声の途絶えた室内はしんと静まり、外はいつのまにか薄暗くなっていた。

街灯の光だろうか、バルコニーからわずかに差し込む光がイケメンを照らしている。

「ねえ」と、イケメンの唇が動くのが見えた。

「俺はニホンという国を知らないし、だから帰してあげることでもない」

それはそうだ、とぼんやりした頭で考えた。

「でもね、ここでの仕事を世話してあげることができる。まだ、混乱しているときにこんなことを言うのは酷かもしれないけど、ここで生活しながら帰り方を探したらどうかかな？」

君がいったとおり泣いていても仕方ないだろ、と決意を促す声がきこえた。

「仕事、世話して」

彼の言う言葉に完全に納得したわけじゃない。

帰り方を探せばいいというが、見つかる保障なんてない。何せ世界地図には見たこともない大陸が描かれ、自分がどこにいるかもわからないのだから。

それでも…それでも、明日からは1人でどうにかしなければいけないのだ。

その気持ちだけが俺をうなずかせていた…

などというセンチメンタルな気持ちに浸ってられないほどムカつく出来事が待ち受けていようとは、夢にも思わない俺であった。

俺をが泣いたり、わめいたりしているうちにすっかり日が暮れてしまったため、仕事の話しは明日にまわし、とりあえず眠ることになった。

「女の子なんだから、少しは警戒しなよ。まあ、間違いは起こらないと断言できるけど。平凡だし」

などと言われながら、イケメンのベッドの片隅を間借りした俺は、おやすみと言ってからもしばらくの間、どうしようもない不安な気持ちからとても寝付けそうになかった。他人の横で寝るっていう緊張も多少あったしね。

けれど、それもほんのわずかの間。イケメンの気持ち良さそうな寝息にひきずられるように俺は夢に落ちていった。今日会ったばかりの人にこんなに頼ってしまうなんてよっぽど不安なんだ俺、なんて思いながら。

そして翌朝、バルコニーから差し込む光を感じながら俺は目を覚ました。

「おはよ」

朝の光のなかでもイケメンはイケメンだった。

「おはようございます…」

ぼんやりとした頭のまま、挨拶をかえす。どうも朝は苦手だ。

一方、イケメンはすでに身支度を整えているように見えた。こざっぱりとした白い木綿の長袖シャツに、同色の腰元と足首意外がダボツとしたズボンをはいていた。シャツの襟は詰め襟のように立っていて、ワイシャツとはすこし異なる形をしていた。

昨日は気にかかる余裕もなくて気づかなかったけれど、イケメンの服装は昔絵本で見たアラビアの国の服によく似ていた。

「さて、朝食に行く前に君に贈り物があるんだあ。じゃじゃあーん」  
そう唐突に宣言すると、イケメンは自身の後ろから何かを差し出した。朝からにぎやかな人だな、と思いつつイケメンが差し出したものへと視線を向ける。紫色のそれは、どうも服のようだった。

「君の格好じゃあ、またすぐに倒れてしまう。たまたま持ってた女ものの服んだけどねえ、大きさも君にぴったりそうだし、ちよつと着てみて」

女ものの服をたまたま持つてる男ってどんな奴だよ…と、いぶかしげな目でイケメンを見ると、ぴんつと立てた人差し指を唇にあてながら「ヒ・ミ・ツ」とのこと。まあ、いいけど。

ブレザー姿であの日差しの中をウロウロするのは、俺も得策とは思えなかった。

それに、イケメンがブレザーのことを「見かけない服」って言うってたあたりも気になった。変に目立ってしまうのは嫌だ。

したがって、俺はありがたく服を頂戴したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7448o/>

---

あらびあんないと!?

2011年6月8日10時38分発行